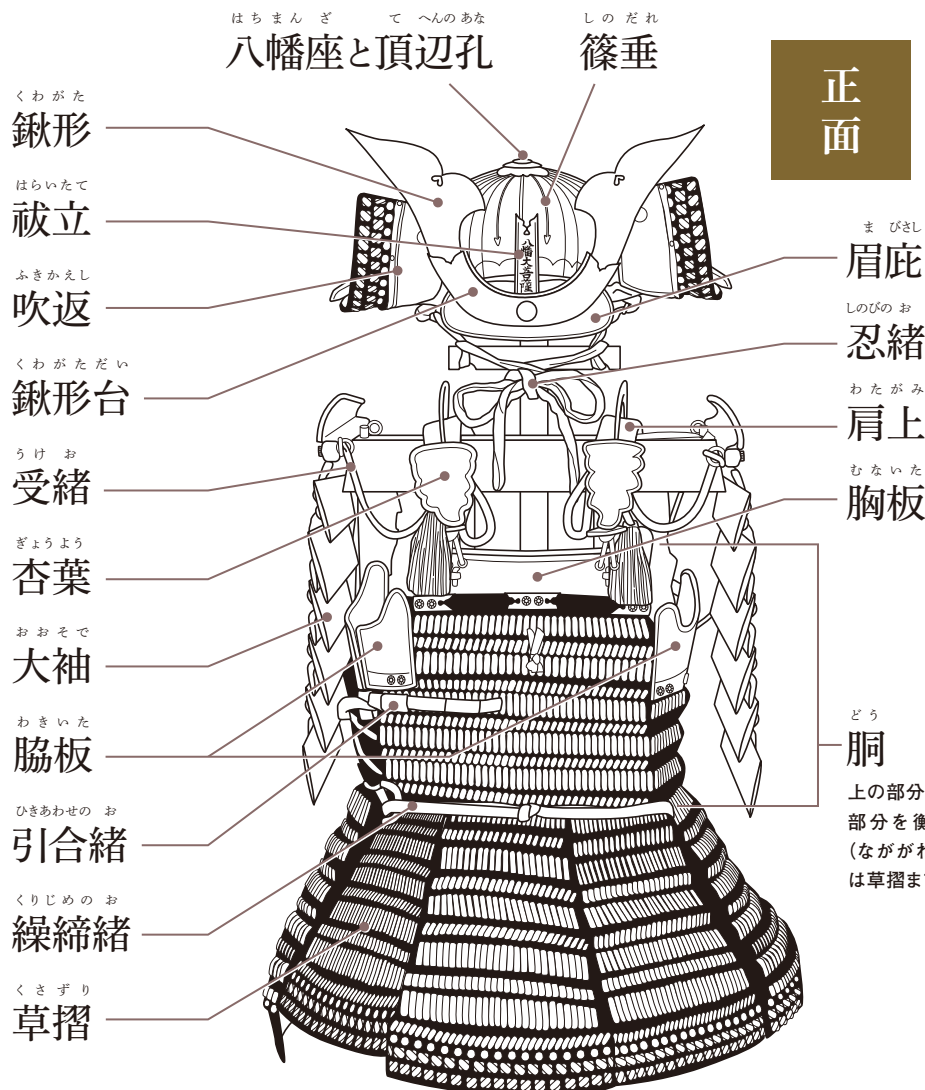


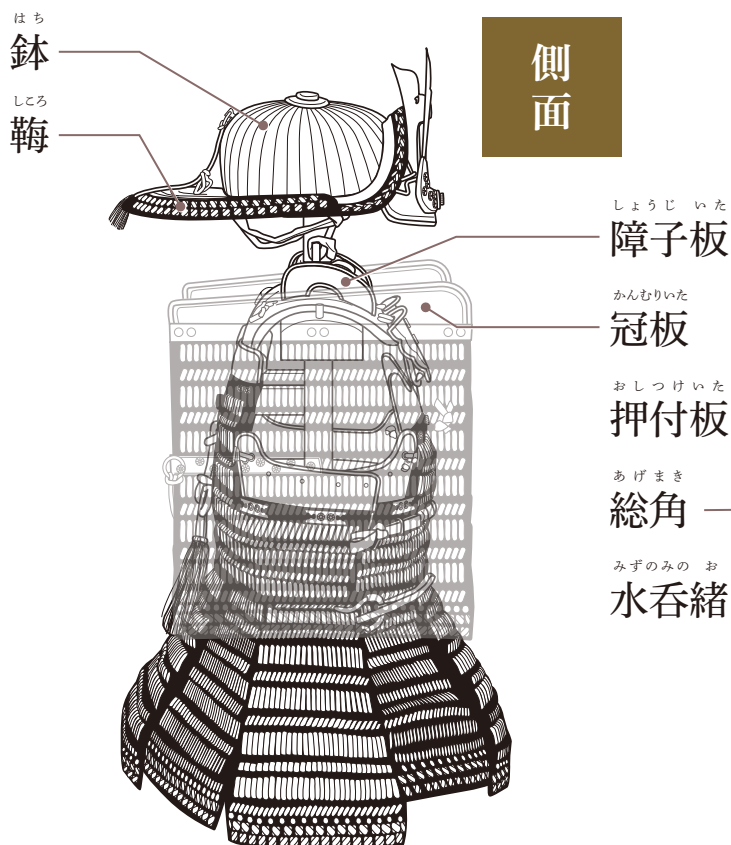
甲冑の部分名称

※この図は縹系威胴丸(重要文化財、京都国立博物館)をもとに描き起こしたものです。
作成にあたり、バンク・オブ・アメリカの助成を受けました。

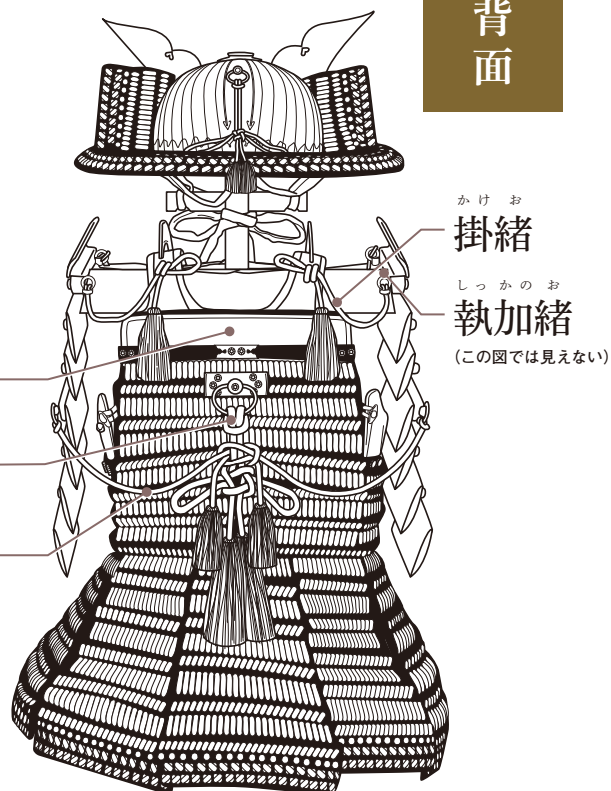
正面



側面



背面



縹系威胴丸は肩上上の障子板が本来とは逆に取り付けられています。
この仕様は、江戸時代の修理に多く見られる改変です。

肩上後方に大袖の紐(掛緒)を結びつけるための
茱萸(ぐみ)金具を付けた「縮(わな)」があります。

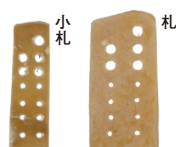
甲冑の素材と技術

札

「札」は日本の甲冑を構成する最も基本的な部品です。縦5〜8cm、横2〜4cm、厚さ1〜2mmの小板に、紐を通すための孔を規則的にあけたもので、形状により細分されますが、ここでは基本的な札を紹介いたします。

素材はおもに鉄または牛革です。基本的に古いものほど大きく、時代とともに小さくなるため「小札」といいあらわすようになりました。

大きさの違い



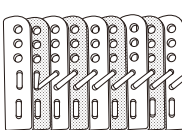
素材の違い



仕上げ方



横に半分ずつ
重ね並べて札板をつくる



着色と補強のために
黒漆を表面に塗る



何枚もの札を少しずつ横にずらして重ね並べ、下側四段の孔を使って革紐などで綴じあわせ、横長の板にしたものを「札板」といいます。鉄札、ないし革札のみで札板とすることもありますが、多くは鉄札と革札を規則的に組み合わせ、軽量化と強度の両立を図る構造をとります。札板の表面は、強化と着色のため漆で塗り固めます。一つの甲冑には数百から数千枚もの札が使われています。

室町時代後期になると、札を束ねて札板をつくる手間を減らすために、札板を一枚の板材でつくった「板札」が登場します。上は表面に多数の筋をつけて札板風にしたもので、切付札といえます。下は素懸威用の板札で、上端を直線的に切り離しています。



切付札



一文字頭の板札

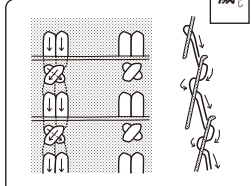
威

「威」とは、札の孔に緒(紐)を通すこと、つまり「緒通し」という意味で、同じ発音の威という字をあてています。

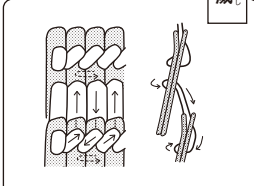
日本の甲冑は、札を横に重ねて並べた札板を札の上側三段の孔を使って上下に威すことで構成されているのが大きな特徴です。威に使う緒を威毛といい、おもに絹製の組紐や鹿の鞆し(革)の紐が用いられます。

威し方には主に二種類あり、隙間なく威す「毛引威」と、間隔をあけて威す「素懸威」があります。また、札や部品を再利用した時に、それを覆い隠し頑丈に仕上げるため、札板と威を含めた甲冑全面を革で包む作例もあります。

素懸威



毛引威



草包



重要文化財 黒草裏腹巻の草摺
大阪・天野山金剛寺

素懸威



黒漆塗紺糸素懸胸丸具足の草摺

草威



重要文化財 黒草威肩紫紅白糸胸丸の草摺
京都国立博物館

毛引威



重要文化財 縹糸威胸丸の草摺
京都国立博物館

金具

- ① 総角付鎖座
- ② 眉底の覆輪
- ③ 線締鎖
- ④ 袖緒付鎖
- ⑤ 茶葉金具
- ⑥ 八幡座
- ⑦ 入八双金具と菊鉾
- ⑧ 笠鉾大小
- ⑨ 責鉾大小
- ⑩ 篠垂
- ⑪ 鎖台
- ⑫ 笠鉾大小
- ⑬ 小桜鉾

※八幡座、茶葉金具、篠垂のみ江戸時代



復元された金具見本

甲冑に使われている金属製の部分を「金具(金物)」といいます。その多くは銅製で、鍛造によって外形をつくり、水銀を用いた鍍金で色どります。右の金具は、縹糸威胸丸(重要文化財、京都国立博物館)の修理にあたり参考にした江戸時代の金具や復元見本です。